

I 研究の歩み

1 研究テーマの設定理由

(1) 時代の要請から

今日、都市化や情報化などの経済社会の急激な変化により私たちの生活は便利になり、欲しい物をいつでも手に入れたり、インターネット上で必要な情報を得たりといったことが容易になってきた。私たちは、多くの情報や電子機器、食べ物などのあふれるものに囲まれ、物質的に豊かな生活を送っていると言えよう。その一方で急激な経済社会の変化の影には、自然環境の減少や少子化、人間関係の希薄化などが社会問題として挙げられている。このような時代の中で、現代の子どもたちは、人やもの、自然との「直接的なかかわり」が非常に少ない環境に置かれていると言える。

幼児期は、自分で見る、聞く、触る、嗅ぐ、味わうなどの感覚といった直接的な経験により、心を揺り動かされ、感動するような体験と出会い、そして、経験と言葉が結び付き、自分の気持ちを言葉で表現できるようになる時期である。この直接的なかかわりが不足してしまうと、子どもたちは、自分の気持ちをうまく表現する術を獲得できず、自分らしさを発揮することができない。自分らしさは、他とのかかわりの中で発揮されるものであることから、自分らしさを発揮するためには、直接的なかかわりが不可欠であると言える。また、幼児期は、自己表出が中心の生活から他者とのかかわり合う生活を通して、他者の存在を意識し、自己抑制しようとする気持ちも生まれてくる、自我の発達の基礎が築かれていく時期でもある。

このような幼児期の特性を考慮して、子どもの自発的、主体的な活動である「遊び」の機会を十分に確保し、「環境を通して行う教育」のもと、自分らしさを発揮できるように、子どもたちが興味や関心をもって人やもの、自然とよりよいかかわり方ができるように、どのような対象と、どのようにかかわらせていくのかを考えることが重要である。幼稚園の特性を生かして、子どもたちが家庭での生活だけでは味わえない様々な経験をもつことができるように、そして、子どもたちが対象とのかかわりを通して、初めて知った喜びやこれまでとは違う自分に気付き、子どもたちが自分らしさを発揮し、よりよく成長していけるように保育を構想していくことが私たちに求められていると考える。

よって、「他とよりよいかかわることを通して自分らしさを発揮できる子どもの育成」のテーマを掲げ、研究を進めることにした。

(2) 本園の実態から

本園は、鹿児島大学、附属小学校、附属中学校と隣接した鹿児島市の中心部に位置する。中心部ということから周辺地域は都市化が進んでいるが、本園は平成8年の園舎改築に伴い園内に豊かな自然環境を構成した。子どもたちが四季折々の季節を感じ、動植物との触れ合いを通して豊かな心が育まれる環境を目指している。

子どもたちの実態として、素直で明るく、自由にのびのびと意欲的に活動する子が多く、園内に広がる様々な自然への関心も高い。また、異年齢の交流も多く、年長児が園のリーダーとして活躍する姿が多く見られる。

また、本園の子どもたちの家庭状況を見てみると、子どもたちは広範囲の地域から通園しており、その多くが核家族である。昨年度実施したアンケート調査から、自分たちの住んでいる地域とのかかわりが薄く、地域の活動に参加したことがある子どもが少ないことや近所で一緒に遊ぶ同世代の友だちが少ないこと、室内で過ごすことが

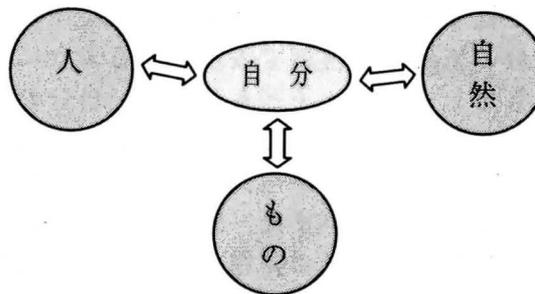
多く、体を動かして遊ぶ機会が少ないことなどが分かった。子どもたちは都市部に住んでいることもあり、豊かな自然環境に乏しく、見たり、聞いたり、触ったりするなどの感覚を通じた直接的な自然との触れ合いが少ない状況にあると言える。

これらの実態を踏まえ、家庭や地域と連携しながら、子どもたちが、人やもの、自然と積極的にかかわりながら遊びを展開し、様々な経験をもつことができる保育を構想していくことが大切である。人やもの、自然との直接的なかかわりによって子どもたちは、自分を表現すること、つまり自分らしさを発揮することができるようになるを考える。

2 研究テーマについて

(1) 「他」とは

子どもたちは、常に自分以外の様々な「他」とかかわり合って生活している。本園では様々な「他」を「人」「もの」「自然」の3分野に分けて研究を進めることにした。

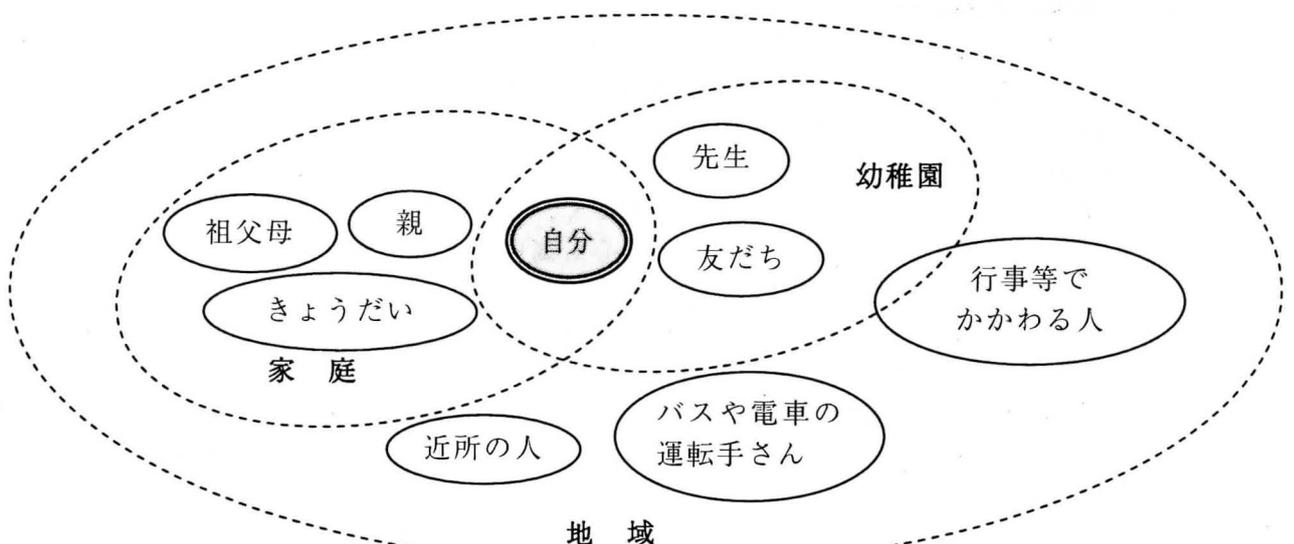


(ア) 「人」とは

子どもたちの周りには様々な「人」がいる。家庭生活においては、親、きょうだい、祖父母などがいる。社会生活においては、地域に住むおじさんやおばさん、お店で働く人やバスの運転手などがいる。幼稚園では友だちや保育者などがおり、子どもたちは常にたくさんの人とかかわりをもって生活している。

子どもたちは、初めての集団生活である幼稚園で友だちや保育者に会う。入園したばかりの頃は期待感と不安感でいっぱいだった子どもたちも、保育者との信頼関係を土台にしながら自分の好きな遊びに没頭するようになる。そして、気の合う友だちや好きな遊びが一緒の友だちとのかかわりを楽しむようになり、同じクラスや異年齢の友だちへとかかわりを広げ、一緒に活動し、協力する面白さを感じるようになる。

「人」とのかかわりは、子どもたちの成長にとって欠かせないものであることを踏まえ、本研究では特に幼稚園の中での友だちや保育者などの「人」とのかかわりを中心に研究を進めていった。(平成19年度 1年次研究)



(イ)「もの」とは

子どもたちがヒーローのテレビ番組の話を持続させるようになった頃、ヒーローのポーズを決めて遊びを楽しむ姿が見られるようになった。そこへ、保育者が空き箱やペットボトル、ロールペーパー芯などの素材と、それらの素材をうまく組み立て、接着することのできるセロハンテープやガムテープなどを設置した。すると、子どもたちは、保育者が構成した環境の中で、自分のイメージするヒーローの道具づくりに夢中になり、出来上がった道具を使ってさらに遊びが深まっていった。

本研究では、「もの」を保育者が教育的価値を含ませながら、子どもたち自らが興味・関心をもって活動に取り組むことができるように、意図的・計画的に構成された遊具や用具、人工的な素材と捉え、研究を進めていく。(本年度 2年次研究)

(ウ)「自然」とは

本園は、市街地にありながら自然豊かな環境に恵まれている。春には園庭のシロツメクサが白い花を咲かせ、園庭全体が白い絨毯のようになる。子どもたちはそのシロツメクサを摘んで花束をつくり、友だちや保育者にプレゼントしたり、ごっこ遊びに使ったりする姿が見られる。夏になると、草が生い茂り、バッタやトンボなどの虫たちに出会うことができる。その虫たちを追いかけて捕まえては、その体のつくりの不思議さをじっくりと眺める子どもたち。秋の紅葉や落葉、冬の霜柱や水たまりの氷など、四季折々の自然事象の中で、子どもたちは自然と季節に合わせた生活を送っている。

本園ならではの豊かな園庭の植物や生き物、そこで起きる自然事象を「自然」と捉え、「自然」とのかかわりについて研究を進めていくこととする。(来年度 3年次研究)

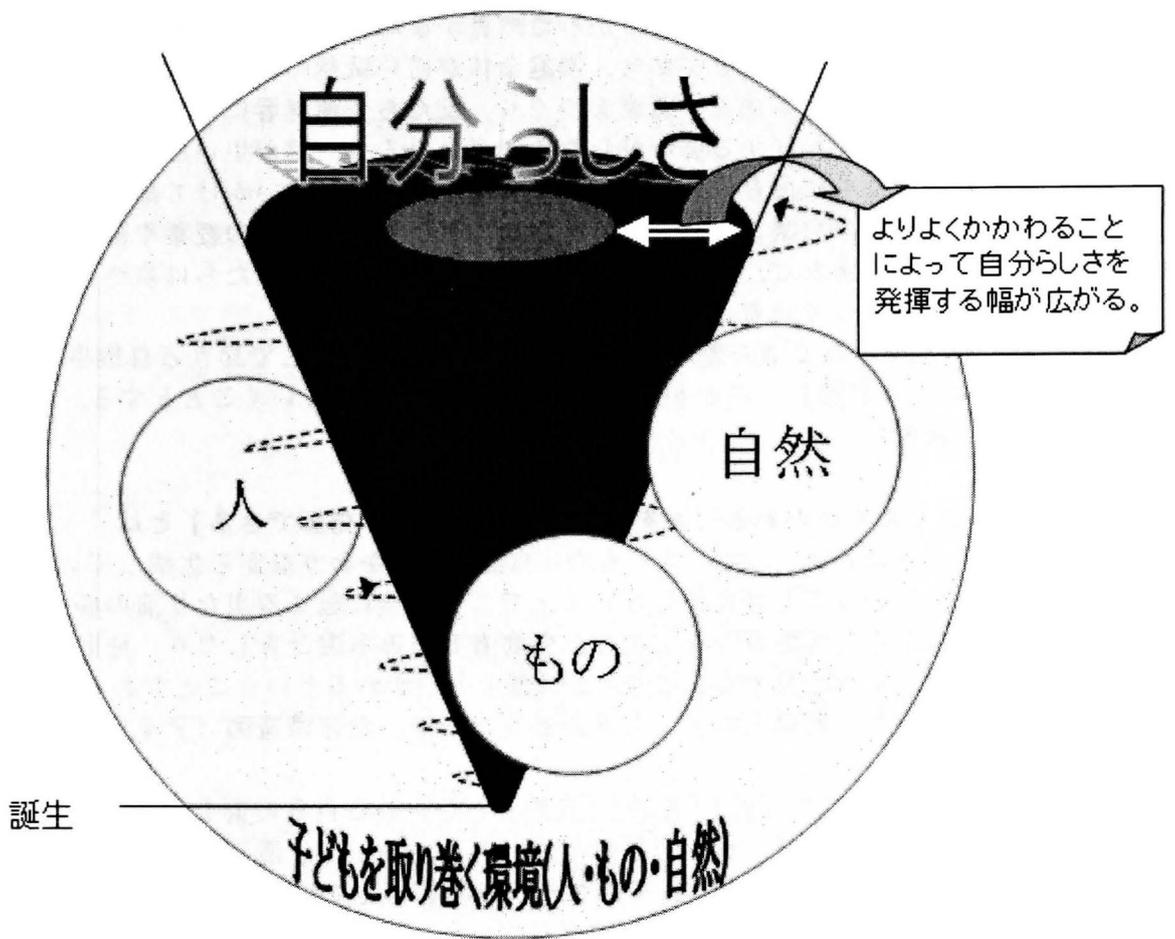
(2)「よりよくかかわることを通して自分らしさを発揮できる」とは

私たちは日々、「他」(人・もの・自然)とかかわりながら生活している。「他とかかわる」ということは生活していく上でごく自然に起こる当たり前の姿である。友だちとけんかをして仲直りをしたり、保育者と積み木遊びをしたり、園庭で花を摘んで首飾りをつくったりすることなどが「他」とかかわるということである。では、「よりよくかかわる」とはどのようなかかわりなのか、全体構造図(P4)に合わせて説明したい。

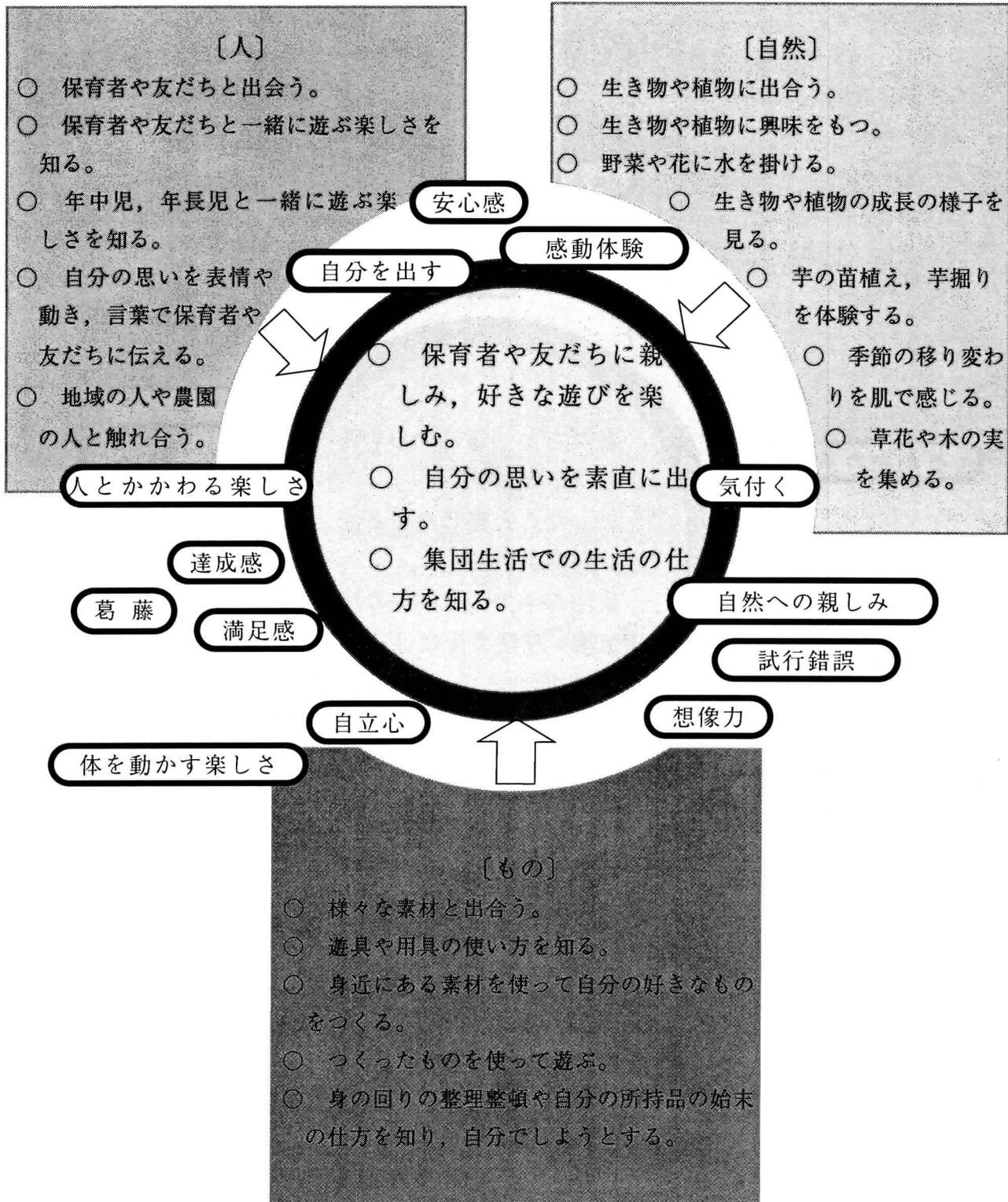
全体構造図は、「人」「もの」「自然」とかかわる自分の姿を表している。私たちは生まれながらにして、自分以外の「他」とかかわって生活しており、成長とともに、周りの様々な環境に気付き、そしてその環境に働きかけていく。「人」「もの」「自然」とのかかわりは、成長とともに広がっていき、私たちは「他」とのかかわりの中で試行錯誤したり、達成感を味わったり、時にはうまくいかないことで葛藤を味わったりする。かかわりの中でこのような体験をするとき、私たちは「他」とよりよくかかわっていると捉えている。年齢ごとに自分らしさを発揮する姿を図で表し、よりよいかかわりの中で育まれる体験について、楕円で囲んで表した。(P5~7)

次に「自分らしさ」の捉え方について説明していく。私たちは「自分らしさ」を、生まれながらに誰もがもっているものであり、子どもたちを取り巻く「他」とのかかわりの中で初めて発揮できるものであると考える。子どもたちの「自分らしさ」とは、かかわりの中で「今表出している姿」と、その子の内にあり時間をかけてゆっくり表出してくる「新しい姿」である。この自分らしさは、「他」とのよりよいかかわりを通して発揮する幅が広がっていくと私たちは捉えている。

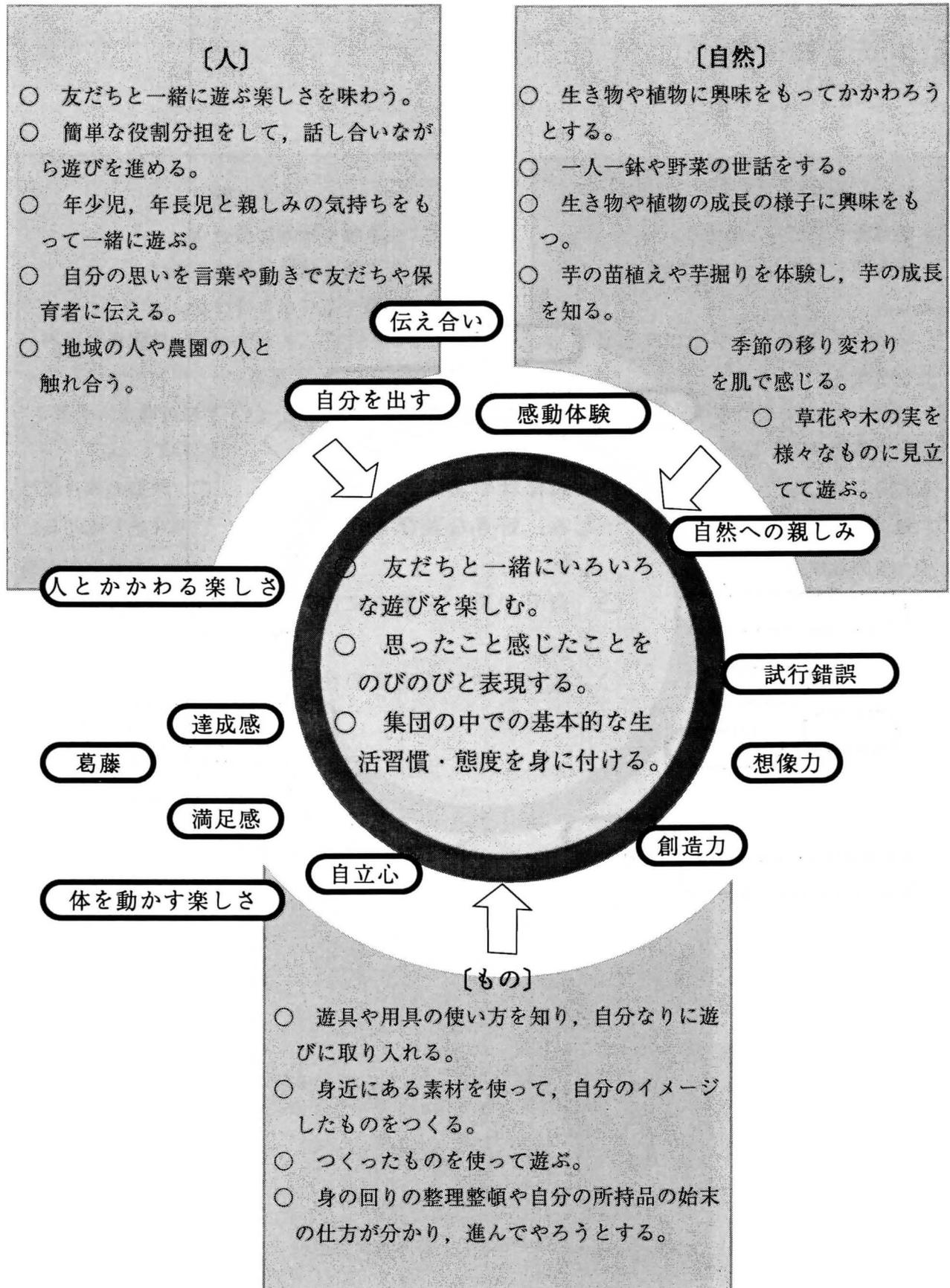
全体構造図



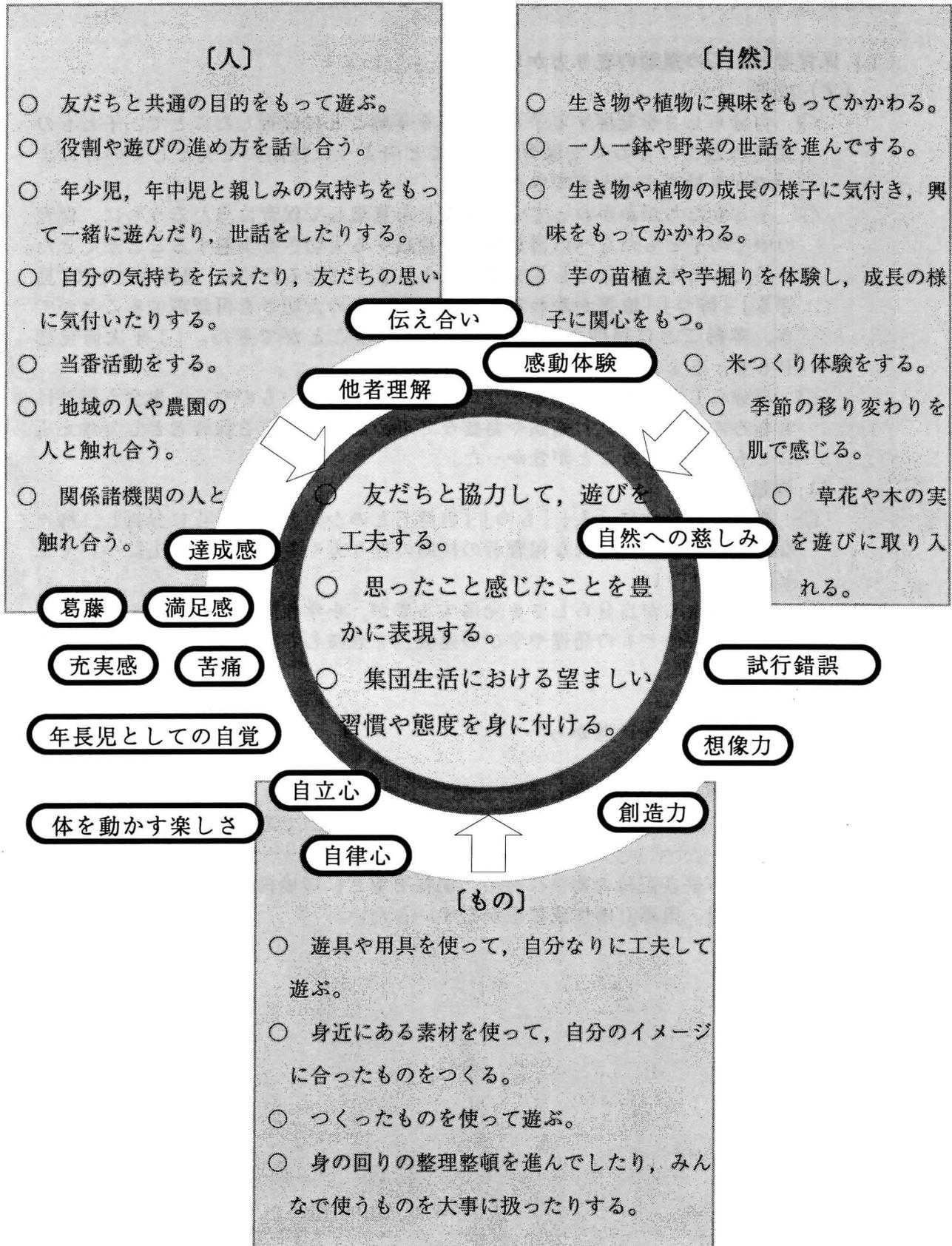
【年少児の姿】



【年中児の姿】



【年長児の姿】



3 これまでの研究の成果と課題

1年次の「人とのかかわり」に着目した研究を通して、「保育者としての援助の在り方」、「環境構成の工夫・改善」の面から成果と課題をまとめた。

(1) 保育者としての援助の在り方から

(ア) 成果

- 自分らしさを発揮する子どもの姿を年齢ごとに分析したことで、子どもの発達の過程に合わせて保育者としてどのように援助の工夫をしていけばよいのかを見直すことができた。
- 子どもたちがかかわっている「人」を意識して保育に当たるうちに、保育の中での子どもたちへの言葉掛けを意識する大切さを実感することができた。
- 子どもたちが自分らしさを発揮できるようになるために、保育者として「見守る」「待つ」「直接かかわる」などの見極めの大切さを再認識することができ、年齢ごとに援助のポイントをまとめることができた。(1年次研究誌P50, 52, 54)
- 自分らしさを発揮できるようになるには、新しいものや人と出会う喜びはもちろんのこと、試行錯誤や葛藤などの心地よい負荷を保育者として与えることも必要であることが分かった。

(イ) 課題

- 今後も継続的に「人」「もの」「自然」とのかかわりをさらに分析し、様々な場面における具体的な保育者の援助の在り方や環境構成の工夫についてまとめていきたい。
- 子どもたちが自分らしさを発揮する姿が、小学校生活へもつながっていけるように、子どもの発達や学びの連続性を意識した教育課程・指導計画づくりに努めたい。

(2) 環境構成の工夫・改善から

(ア) 成果

- 各年齢の目指す姿に合わせて、「人とのかかわり」の視点から子どもの発達に合わせた環境構成について見直すことができた。

(イ) 課題

- 引き続き記録の蓄積に努め、記録をもとに環境構成を工夫・改善し、教育課程・指導計画作成に生かしていきたい。